

平成15年度
前期日程

小論文の出題意図と採点基準

下関市立大学

問題一 スローフード宣言を通して、「これからの食のあり方」を探る

【出題意図】

日常の身近な食生活のあり方を根本から問いかける複数の短文を参考に、あるいはそこからヒントを得ながら、これからの食のあり方と食を含むライフスタイルについて、自分の考えを論述させる問題である。つまり、現状の食生活のありようを通して現代文明の問い直しと現状の打破を訴えかける参考文を読み、その文章から喚起される事柄を、日常における自らの感受性や問題意識に含み込んで、課題性を整理しながら、いかに自分なりにこれからの生き方の明確な主張に結びつけているか、を問うている。

若い受験生のほとんどは、普段の食生活についてそれほど意識して考えたことはないに違いない。ある面で受験生の虚をつくような問題かもしれない。しかし「食の安全性」を脅かすような事件も相次ぎ、このところ「スロー・フード」や「地産地消」を始め、食のあり方を問い直す議論も盛んになってきている。このテーマは、現代の文明のあり方に関連して、根本的な見直しが迫られている、今や誰もが考えざるを得ない広がりを持った課題でもあり、普段においてそれらをどのように自らの課題として引き付けて捉えようとしているかが問われよう。

課題文をふまえ、主題に沿って論を組み立てながら論じていくという論述の形式は、小論文の基本である。課題文を読み込み、論述を展開する過程で発揮される受験生一人一人の発想の自由さ、独自性こそ、彼らの全体的な力量を表す最も確かな指標に他ならない。今回の場合、自分の日常的な体験における感受性やそれと普段の問題意識との関連づけ方、さらにはそれらを主題化して何らかの主張をもった文章に仕上げる力量などが試される。

そして、単なる本文にのみ追従した感想文やありふれた一般論や賛否論に終始させず、課題の大きな広がりの中から現代文明や現代社会の課題に粘り強く迫り得て、自分が設定した主題に沿いながら、論述(文章世界)を深めていることが、何よりも大事である。

【本文解説】

課題文[A]の「スローフード宣言」は、スピード信仰の現代工業文明を象徴する“ファーストフード”あるいは“ファーストライフ”への反撃、そしてそこにおけるスピード信仰からの開放や趣向の貧困化からの脱却を、“スローフードな食卓”から始めようと、高らかにそして広く呼びかけている。

課題文[B]では、化学物質や過度な加工による食べ物の危険性に対する認識が深まり、食の安全性に対する問題意識もずいぶん広がってきている中で、私たちを取り巻く食習慣のゆがみの実態から食のあり方を求め直そうと訴える著者(大谷ゆみこ)が、現在の食生活における7通りの変化(ゆがみのベクトル)を具体的に整理したものが示されている。大谷は次のように主張している。

- ・土地から切り離された、匿名の、脈絡のない、つながりとバランスを欠いた、部分的でばばらな、生命の秩序が乱された「食品」、身体との対話が忘れ去られ、関係性から抽象され、単体として分類され、栄養価という数量に還元された、普遍記号としての「食品」、部分ばかりを寄せ集め、組み合わせで加工し、さまざまな人工添加物を加えた「食品」は、どれも本来の意味における食べ物ではない。
- ・不自然な食習慣が定着してしまった現実を直視し、ここに示した7つの変化の矢印を逆向きにたどることを求め、各地で風土に根ざした地域自給型の、命を育む生命を活かす食習慣を取り戻すことが急務である。
- ・工場に依存しない食生活を取り戻し、無理のない範囲で取れる、気候風土が応援してくれる作物を、自ら料理して食べ始めることが、危険な現代食生活から抜け出す唯一の方法であり、そうして脱出しない

限り、健康を取り戻すことはできない。

ここに示される 7 つの食習慣の変化やゆがみをそのまま表しているのが、「ファースト・フード」だろう。これらの食習慣の変化を通して、現代人がかかえる健康上の問題の多くが「ファースト・フード」化と密接に関係していることがよくわかる。その変化のベクトルを逆向きにたどることは正に「スロー・フード」化につながる。7 つの食習慣の変化を直視して、食べ物や料理法を含む食生活全体を見直し、ゆがみを正そうとすることは、「新しいライフスタイルの提案」であり、社会変革の呼びかけでもある。

課題文[C]は、最近事件として扱われた食品表示の虚偽は企業の姿勢を根本から問うものではあるが、その食品の表示自体にもごまかしや食のありようの問題点が含まれていることを説き起こしながら、安全で良質、まっとうな伝統食の知恵に学ぶことの重要性を訴える投稿文である。そこでは、

- ・先人たちは気候風土や自然界に存在する微生物を巧みに利用して食べ物を作ってきた。手間ひまかけて保存食も準備した。しかし、そのような知恵や食べ物を大事にする精神は今失われかけている。
- ・長年の歳月を経て淘汰されずに残ってきたそれなりのよさを引き継いでいる伝統食の知恵を見直し、日々味わい楽しんでこそ、食の文化と安全を将来世代に手渡せるはずだ。

などの主張が込められている。

利益優先の大量生産食品は時間を節約し、本物らしくするために種々の食品添加物で補い、流通の都合で保存料を用い、それを食べ続けたらどうなるのかわからないまま、まるで人体実験にさらされていると、ここでも現在の手軽で便利な食品の「ファースト・フード」化のあり方が問題にされ、それへの対抗として、「スロー・フード」化につながるような手間をかける伝統食の知恵に倣うことの大事さを訴えている。

この 3 つの参考文はいずれも、普段あまり意識していないのだが何気なく日常を覆っている食生活のゆがみやごまかしに気付かせ、その問題が現代文明のありよう自体の課題性に広がることが示されている。そして、「新しいライフスタイルの提案」として、じっくりと生活の喜びをかみしめ、生の活力を取り戻すことのできるスローライフへの志向が含まれている。

【採点基準】

主として、以下の 3 項目についてどの程度まで要点を押さえ得ているかに応じて評価を行った。

(1) 本文の「読み」について〔読解力〕

関連しあう 3 つの参考文の内容を、自分の日常生活の体験や感じ方に関係づけながら、自分自身の食生活のあり方や自分自身の問題意識にひきつけて読み込んでいるか、を答案全体から判断した。つまり、「ファースト・フード」の課題性をどれだけ明確に、また、現代文明の課題として広がりを持って捉え得ているか、展開の程度を評価し、参考文を無視したり、なぞるだけだったりのもの、あるいは抽象的・形式的一般論にとどまるものは、低く評価している。

(2) これからの食のあり方、食を含むライフスタイルに対する考え方が独自に打ち出されているか〔結論的な主張内容の明確さ〕

設問の主旨(主題)を的確に捉え、何を焦点化して論じようとしているかが明確になっているかどうか、その主題に斬新さや独自性があるかどうか、を答案全体から判定した。小論文は単なる感想文ではない。自分なりの主張内容が込められているかどうかは重要なポイント。

例として、つぎのような内容の展開でテーマが主題化できることを想定していた。

- 「ファースト・フード」を拒否するような、「スローライフ」の提案
- 「時間に駆り立てられるありよう」「ゆとりの喪失」「デジタル性」の克服
- 「画一化・均質化」「個性の喪失」「風土性の喪失」からの脱却
- 「失われてきた自然とのつきあい」「自然共生の追求」からの食生活の見直し

- 「現代文明の克服」との関連での食の重要性
- 「家庭料理」「家族のコミュニケーション」の大切さ
- 「自分自身の実践例」や既に普通に「心がけていること」 ……………など。

(3) 論述の展開度について〔論述展開度〕

結論への主張に向かって、どれだけ内容を進化させながら明快に論じているか。論拠付け、論述の説得力・構成力、および文章の表現力・わかりやすさ・魅力など、論述の出来具合を判定した。

例として、以下のような論述の展開を想定していた。

- 食糧自給率があまりにも低い（食料輸入大国）日本の危機的状況から論ずる
- ファースト・フードの課題性を、現代文明のありようまで含めて徹底的に究明するところから論ずる
- 食生活をないがしろにしがち、改善への努力が不足がち、現代社会や行政のありようから論ずる
- 偽ラベルやBSE事件、農薬の不正使用事件などを通して、食の安全性確保や健康の面から論ずる
- 「地産地消」や「身土不二」あるいは農村と都市との交流を盛んにするような取り組みから論ずる
- 上述とも関連して、消費者と生産者・提供者の信頼関係構築の課題から論ずる
- 以上のこととも関連して、反グローバリゼーションの世界的な動きから論ずる
- 農政のあり方や農業再興につながる方策の提案と結びつけて論ずる
- 環境面から食確保の輸送の短距離化の正当性（小さなフードマイレージを目指す）から論ずる
- 大量生産・大量流通・大量消費・大量廃棄が定着している現代社会のしくみを問題視するところから論ずる
- コスト面の効率追求の行き過ぎの課題から論ずる
- 伝統を重んじたり、こだわりを大事にしたり、手間をかける料理を重視したりすることから論ずる
- 子供への教育面から学校給食への今後の提案を通して論ずる
- 自分の具体的な実践体験から論ずる ……………など。

以下の論述にとどまるものは低い評価とした。

- ・ 単なる感想、自分の食体験を無視した表面的な一般論に留まるもの
- ・ 「ファーストフードはよくない」「手料理を心がけよう」「自然を取り戻そう」といった皮相な主張、あるいは、「スピードを求める都市生活上どうしようもない」といった単純な諦め、ニヒルな主張など、あるいは、筆者への皮相な反論・反発 or 肯定・追従に留まるもの
- ・ 本文に振り回され、混乱して支離滅裂で、ばらばらな印象を与えるものや本文の都合の良い断片だけを引用した手前勝手な主張のもの

以下のような論述を中レベルのものとして評価した。

- ・ 具体例が生きていて、一応の読み応えのあるもの
 - ・ 自分の主張に沿って、一応の展開とまとまりを見せているもの
- なお、ここで断っている「一応の」というのは、<感受性・独自性に乏しいもの><問題意識が希薄なままのもの><内容が十分に示されないままのもの><脈絡が示されないままのもの>などをさす。また、「スローがいい」「手間ひまかけよう」といった紋切り型のものや、表面的に「～すべきだ」と述べるもの、他人事のように「～してほしい」と述べているもの、あるいは、論述に奥行きが乏しく中身展開のニュアンスが伝わってこないものなども、ここで中位の評価にしている。

次のような、主張への裏づけが明確で論述力・文章力に魅力があるものに高い評価を与えた。

- ・ 粘り強い考察に基づいた、主張の展開に独自性があるもの
- ・ 考察に奥行きが感じられ、紋切り型を超えた発展性が感じとれるもの
- ・ スローフードやスローライフの希求に説得力があるもの
- ・ 広がりの中で種々の課題性を捉え、ライフスタイルのありようが明確に提案されているもの……………など。

(4) 表現表記上の問題〔減点対象〕

以上の論述内容の行き届き具合で評価した上で、以下のような表現表記上著しい問題を含むものは減点した（これは問題二の場合でも同様である）。

- ・ 段落構成がなく、また、でたらめだったりして、読みづらいもの
- ・ 論の構成、筋立てが混乱して主張が通らず、読みづらいもの
- ・ 漢字の間違い、誤字・脱字・当て字が目立つもの
- ・ て、に、を、は、句読点のミスが目立ち、字が汚く読みづらいもの
- ・ 全体の字数が、制限字数の7割以下のもの

【答案にみられた特徴や傾向】

- ・ 表現表記上、問題となるような答案は少ない方であったが、中には「てにをは」の乱れが見られ、誤字や当て字がさまざまに見られた（「単縮」「食性活」「居食住」「危検」「業積」「不可決」「小人数」「育製」「製産」「異和感」「食宅」など）。問題なのは、段落構成（論述全体の構成）ができてないか、でたらめなもの。いくつか散見されたが、それらは採点する際に読みづらさが目立ってしまった。
- ・ 3つの参考文の理解度については、自分自身の食生活との関連ではほぼ理解できていた。「ファーストフード」を、現在の「食」の課題を象徴するものとして広く捉えずに「即席料理一般」や「コンビニ食品のみ」あるいは「ファーストフード・チェーン店の課題のみ」で捉えるといった、一面的あるいは勝手に解釈していたものも見られた。
- ・ 立論の展開として、特に「ファーストフード賛成論」が目立った。「反対論」や「折衷論」も含めて、表面的な賛否論に持ち込む傾向が多く見られた。本問は賛否を問うのではなく、現在のあるいは文明的な課題となっている「食」の課題に考察を加えながら、これからの方向づけとして、食のあり方と食を含むライフスタイルについて論述を求めている。立論として賛否から説いて行くやり方もあって当然だが、それが表面的な対立軸（ファースト対スロー）としてパターン化され、現代文明が強いる方向軸に迫りえないまま、浅薄な論じ方に陥ってしまいがちになることも配慮すべきだろう。
- ・ また、以上の表面的な賛否論とも関連するが、紋切り型の主張を行っているもの、良い悪いの評価を何ら脈絡無しに言っているもの、表面的に資料文の用語に引きずられ、実感やニュアンスが伝わってこない言葉だけが走っているもの、自分なりの主張内容が不明確なもの、設問意図や参考文の内容に即さずに手前勝手な主題での記述になったもの、などはどうしても評価が低くなる。小論文出題の解答に臨む際には、設問のみならず、資料文がどのように示されているかを含めて、まず出題意図を的確につかみ取って行くことが肝心なことを踏まえるべきだろう。
- ・ 本問のねらいとしては、上述の採点基準(3)論述展開度で例をいくつか示しているように、効率社会、時間短縮・スピード化、西欧化、国際化、共働き、大量生産方式、企業利益のみの追求や企業倫理、農漁業の疲弊など社会的な課題性と関連づけて、「ファーストフード」がもたらす問題の背景を、全体的・構造的に捉えていること、あるいは、現代文明のもたらす方向軸に対抗する運動としての「スローフード」の意味合いや意図を引き出していること、そして、そのような内容についての考察が及んで行く範囲の広がりや深まりなどを重視していた。
- ・ 今回、多く見られた論述内容は、自らの食の体験を通しての食の危機感を表明したもの、家庭や家族のあり方や消費者の視点から安全性や健康問題としてファーストフードの課題を捉えようとしたもの、スピード重視や便利さ追求など現代社会の課題性からスローフードを評価するものなどが大半であった。しかし、それらにおいても、論拠付けが明確なものや独自の思考の深まりが見られるものはそれほど多くはなかった。自らの日常生活のありようを問い直すことは容易ではないに違いないが、普段からどれほど自分の問題意識を深めているか、自分の考えを整理しているかが問われているように思われた。
- ・ 中には、自分が正直に感じていることを通して、ライフスタイルから文明論まで広がりをもった展開のしっ

かりした内容と主張に結びついたものが見られた。食生活を社会歴史的変遷から説いたもの、労働時間短縮の方向から料理教室の参加機会を増やすような場面において行政の役割の大きさを論じたもの、あるいは、都市と農村の交流（グリーンツーリズムや産直など）の運動に着目したものなど、高く評価できる論述もあった。

- ・ 資料文の要点を的確に押さえ、自らが感じたことを通して表現する能力、さまざまな要素を関連づける能力、設問の意図に即して素直に独自に内容を展開していく能力などが、普段の問題意識と共に、今の受験生に最も問われているように思われた。

問題二 IT普及の影響に関する意識調査の図表を通して、「コミュニケーションのあり方」を探る

【出題意図】

コミュニケーションの手段が多様化することによって、コミュニケーションのあり方がどのように変化しているか、普及によるマイナス面はどのように感じられているか、などの調査結果の図を6つ示しながら、そこから読み取れる課題を抽出させて、その課題への対応策を含めてコミュニケーションのあり方を問うている(図は内閣府編『平成13年度 国民生活白書』および内閣府国民生活局「平成13年度 ITによる家族への影響実態調査」、いずれも2002年発行、に拠った)。

インターネットや携帯電話(携帯電話およびPHSをいう)、いわゆるITの普及が進み、仕事や生活の中で、IT利用が身近なものとなってきている。携帯電話などは、受験生の年代も含めて特に若い層におけるその利用の度合いが高まっている。こうしたITの生活への浸透は、日々の生活の中で、家族や友人とのコミュニケーションに変化をもたらし、家族関係にもさまざまに影響を及ぼしている。ITが多分にコミュニケーションのツールであり、家族や友人との関係を密にする面がありながら、一方で、親子間での互いの疎外を強めてしまい、問題を感じさせるような面も生じているのである。

図から読み取れる内容を関連づけながら、新たな情報通信ツールの普及がもたらす問題点を明らかにした上で、家族や友人等との相互のコミュニケーションを一層豊かにするためにはどのような対応が必要とされているか、についての論述を求めている。図表の一つ一つの読み取り、さまざまな要素を相互に関連づけながら要点を整理した上で、どのように課題の抽出ができているか、さらに、その課題への対応策について自分なりに見解表明・論述展開できているか、資料分析能力と同時に、一つの筋立った自分なりの主張につなげていく論述能力を問うている。

受験生も既に携帯電話を始めとしてインターネットなどの便利さを既に享受しているに違いない。しかしその便利さとは裏腹に、ある面でコミュニケーションを貧しくするような側面があることをどのように捉えているか、そのような矛盾を乗り越えてよりよい方向に向かってどこからどう対処したらよいか、受験生諸君の周辺の身近なところで生じている課題に対する普段の問題意識のありかを尋ね、課題の整理の仕方、ひいては、自分に引きつけたところでの解決への積極的な姿勢のあり方を問うてみようとする問題でもある。IT普及がもたらす家族のコミュニケーションへの影響に関する意識調査の結果が示す内容と課題に対して、自分なりにどれくらい見解表明・論述展開できているか、が評価できたらよいと考えていた。

なお、参考にした資料の一つである『平成13年度 国民生活白書』では、引用した図の後に、次に示す欄が付記されている。そこに示されるような対応策の独自の展開を求めている。

「ITを子どもが利用するようになると、いつでも連絡を取ることが可能になるため安心できるという考えがある一方で、子どもが自由に外部との接触を持つことが可能になるため、目が行き届かなくなるという考えもある。ここでは、後者の考えに対する親の心得について紹介する。

(1) 内閣府「ITによる家族への影響実態調査」結果

本文で述べたITによる悪い面が「切実な問題だ」と回答した人に対し、具体的な対策を立てているのかを質問している。その内容を見ると、「自宅では携帯電話を使用しないなどの制約を設ける」、「食事等、一緒に過ごす機会を作る」、「請求明細書を見ながら、利用金額、利用相手について親子で話し合う」といった対策を立てている家庭が多い結果となっている。

(2) 東京大学の橋元良明教授の意見

1 子どもの教育

- ・ある種の情報に接触したり、ある種の情報行動に過度にのめり込んだりすることが危険であり得ることを犯罪

記事等の事例をもって十分理解させる。

2 親の情報社会の積極的な把握

- ・親が積極的に情報社会の新しいしくみや情報メディアについて理解し、今世の中でどのようなことが進行しつつあるのか的確に把握しておく(「親は無知で話をしても無駄」という反応が、もっとも親子を分断する)。

3 時間的制約

- ・家庭でのインターネット利用には、一定の時間的制約を課す。

4 家庭団らん時間の確保

- ・例え家族全員は集まなくても、週に一度は、携帯電話やパソコンを身近に置かない団らんの時間を確保する。

5 インターネットを共通の話題に

- ・インターネットの利用内容について、互いの興味を紹介し合い、積極的に共通の話題にする。

6 親からの積極的なメール発信

- ・親自身が、積極的にメールを利用し、子どもに発信し、子どもからも気軽に親に発信するような環境をつくる。」

【図表解説】

・各図の内容

図1 ITを利用することによる家族や友人との関係の変化(関係が密になったか疎遠になったか)

関係が密になったと答えた割合は、同居の家族で36.1%(年代別には年代が高くなるほど高くなる)、非同居の家族・親類では22.7%(年代別には20代以下が幾分低いがそれほどの差はない)、友人では40.8%(年代が低いほど高くなる。10代で56.5%)。

年代が上がるとともに同居との関係がITによって密になったと回答する者の割合が高まる一方、友人との関係では、もっと明確に若い世代ほどITによって密になったと答えた割合が高まっている。

図2 家にいると思われる友人・知人への電話のかけ方(携帯電話へか加入電話へか)

携帯電話(携帯電話)を所有している人で、自宅にいる相手への通話手段として、携帯電話を利用する割合が、年齢層が低くなるほど高くなる傾向がある。若い方の10代や20代では6割を超えて他世代を引き離している。

図3 親が子どもの電話相手を把握している割合(子どもの電話相手を知っているか)

子どもの電話相手を親が把握している割合は、子どもの携帯電話(携帯電話)の所有の有無によって大きく異なっている。「子どもの電話相手をたいがい知っている」と回答した親の割合は、男子高校生で携帯電話を所有していない場合は47%だが、所有している場合は32%まで低下する。女子高校生では、さらにその差が大きくなり、非所有の場合の74%に対して、所有している場合43%に低下する。子どもが携帯電話を所有していれば、親は子どもが誰と電話しているか把握できなくなる割合が高まってしまう。

図4 ITによって変わる生活行動(どのような変化にあてはまるか)

ITを利用するようになって、生活行動がどう変化しているか。

「時間を気にせず、あるいは「他の家族を気にせず」、「友人と連絡を取れるようになった」と回答している20代以下の割合が高い。他にも「家族より友人中心に行動するようになった」、「自分の部屋で過ごす時間が長くなった」、「喧嘩の仲直りがメールで簡単に切り出せるようになった」、「家族に内緒の話ができた(増えた)」など、若くなるほど割合が高いものが多い。若い世代は、友人中心の付き合いに移行しながら、家族内では、個室化、個別化(個物化)が進行しているようでもある。

一方、他の世代(大人世代)に割合が多く見られるものでは、「他の家族の行動が把握できるようになった」や「家族の信頼関係が深まった」という家族関係の絆を強めるような面が出ている反面、「他の家族の交友関係がよくわからなくなった」と問題を感じさせる面も一方で生じている。

生活変化は若い世代で顕著だが、大人世代では家族関係を強める面と疎遠にする面の両方が生じている。

図5 携帯電話を保有する子どもがいる場合といない場合、ITの利用により家族の行動がよくわからなくなる悪い面があると感じる親の割合(どのような割合で感じられているか)

ITを利用するようになって、家族の行動が個別化し、家族の行動がよくわからなくなるという悪い面がある」と感じている割合は全体で30%、それも携帯電話を保有する子どもがいる場合に高くなって36%、特にその場合の母親で46%に達している。

図6 ITの利用により家族の行動がよくわからなくなるという悪い面に対する感じ方(仕方がないと感じているか切実な問題と感じているか)

「仕方がないと感じている」と「切実な問題と感じている」割合はほぼ半々である。

図は多いが、それらの図から要点を以下のように端的につかみ取ることが大事である。

・ 図1～6から読み取れる要点

ITは家族や友人との関係を蜜にすることに寄与している。

若い人ほど携帯電話にかける傾向が強くなっている。

親が子どもの電話の相手を把握している割合は子どもが携帯電話を所有している親で低くなる。

ITを使うようになってからの生活の変化は20代以下で顕著であり、若者は友人関係に移行し、全体として家族内の関係を強める面と個別化の進行との両面が認められる。

携帯電話を保有する子どもがいる場合、ITの利用により家族の行動がよくわからなくなると感じる母親の割合が高い

の悪い面を「仕方がないと感じている」と「切実な問題と感じている」割合はほぼ半々である。

【採点基準】

主として、以下(1)～(3)の項目に応じて評価を行った。

(1) 図の内容が正確に読み取れているか〔図の読解力〕

(2) 図表を相互に関連させながら要点を的確に押さえ、問題点を的確に指摘しえているか〔内容の整理と要点・論点およびそれらのつながりの明確さ〕

- 個別化の進行で、家族間で互いに目が行き届かなくなる
- コミュニケーション・ツールが、ある面でコミュニケーションを貧しくする面も生じさせる
- 便利さを享受させる技術の進展を受け入れていく際、便利さの裏側で生ずる課題性への対応が必要とされるなど、的確に論点が引き出せているかを評価する。

(3) 主題化した論点(問題点)を深めながら「相互のコミュニケーションを一層豊かにするための対応策」がどれだけ明快に論じられているか〔論述の展開度〕

便利なコミュニケーション・ツールが、ある面でコミュニケーションを貧しくする面も生じさせるというような、便利さの裏側で生ずる課題に対して、前述で紹介しているような親子間での対応策【使い方に制約を設ける、一緒に過ごす機会をつくる、共通の話題にして話し合う、危険性を知る、世の動きを捉える、双方向にメール交換し合う、など】がわかりやすく述べられているかを評価している。

【答案にみられた特徴や傾向】

- ・ 多くの図面を目の当たりにして、ポイントの押さえ方において、それぞれの力量が問われ、まとめるまでの時間配分が相当左右していたようだった。図の理解と解説に時間と字数を取られ、肝心の対応策が疎かなものになっていたのが多かった。図の説明はしていても、結論部分は支離滅裂になって書ききれないのである。全体の図をまとめた上で論を展開し、出題の意図通りに明確な主張を行っている論述は極めて少なかった。
- ・ 図の読み取りに関しては、各図を正確に読み取るうとするものと、全体的に関連づけて読み取るうとするも

のとに分かれる。それらも丁寧に粘り強く図表分析・関連分析できたものと、ほとんど図と図相互の関連を読み取らないまま（関連づけが弱い！ 相当意識すべし！）、自分の関心事のみに限定して、あるいは、特に図4などで使いやすい項目のみ取り上げて、勝手な論述を行ったものとの落差は大きかった。図からは、家族関係のありようを変化させていることが示唆され、その点に関して世代間に認識のズレが生じていることが明確に出ているのであって、「家族関係が希薄になった」と安易に結論付けることはできないはずであるが、そのような単純な結論付けが多く見られた。（正に「ファースト」風に）単純化して解答するのが、まるで受験生の取り組み方の姿勢として当然のようになっているかのように。

- ・ 図から導き出される問題点を踏まえた上での結論として、対応策が明確に打ち出された論述は少なかったが、内容的には「直接の対話を大切にすると」「IT技術の一層の進化と利用法の改善でコミュニケーション向上を図る」の二つのパターンが多く見られた。他に法制度整備の提起や極端なIT否定論などもあった。総じて、「ではどうすればよいのか」「どこから取り組めばよいのか」がなかなか打ち出せないようであった。あるいはどうしても抽象的、短絡的、一面的になりがちで、裏づけが明確な総合的な視野に立ったユニークな対応策はほとんど見られなかった。
- ・ 与えられた資料に対して、素直に、あるいは虚心に、読解に向かうという姿勢で望み、丁寧に・正確に記述していれば相当評価できるものになると考えていたが、想定問題などで練習を積んだ通りの内容のままに、パターン化した紋切り型の記述を行い、自らの思いや考えの表現ができないままに、的を外していた答案が結構見られたのは、実に残念であった。
- ・ 基本的に重要なことは、素直に資料を読み（与えられた素材に立ち向かい）、各要素を関連づけながら、ある一つの自分なりの主張（自分が考えうる対応策）につなげていく能力である。また、もう一つは今回のねらいでもあったが、身近な日常的な事柄を通してでも、そこに立ち現れる社会事象の課題に対する、自らの問題意識の練磨である。普通に、世の中のさまざまについて、複数で互いに議論し合っておくことが必要なのではないだろうか。正に親子の間でも。